

2011年秋、平壤

波佐場 清

立命館大学コリア研究センター客員研究員（元朝日新聞編集委員）

2011年9月3日～10日、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）を訪れた。「朝鮮問題を考えるジャーナリスト懇話会」（報道各社のOBら約50人）の訪朝団10人の一員として、だった。私自身、1991年に初めて訪朝して以来、通算8回目、直近では2004年8月と05年3月に相次いで訪朝して以来、ほぼ7年ぶりだった。

訪朝のたびに一種、もどかしさを感じてしまう。新聞記者時代からの習い性で何でもかでも体当たりで聞いてしまいたくなる。平壤ではそれがかなわない。だから、旅を終えた後もどうもすっきりしない。結局のところ、平壤はどうだったのか――。

とはいっても、8回も繰り返し訪れていると、それまでとの違いは分る。以下、今回の訪朝で感じたことを書いてみたい。

■国産乗用車

平壤に入ってまず感じたのは市内がにぎやかになり、活気を帯びたということだ。車が多くなった。乗用車、バン、マイクロバス、四輪駆動……。

平壤市内の車と言えば、これまでは古びた乗用車のほか、いつもぎゅうぎゅうに込み合ったトローリーバス、路面電車、荷台に人々を載せたトラックというイメージが強かった。それが様変わりし、

乗用車もベンツ、フォルクスワーゲンといった従来のものに加えて中国車、東欧の車、東南アジアの車、そして何より、真新しい北朝鮮の国産「平和自動車」の小型セダン「フィッパラム」（「口笛」の意）がよく走っている。

「平和自動車は、韓国の統一教会系の自動車メーカーとの合弁で「フィッパラム」のほか、バンの「サムチョルリ」（朝鮮半島の別称「三千里」の意）、四輪駆動「ポックギ」（「カッコウ」の意）もつくっている。

タクシーもよく目についた。タクシーはこれまでもなかったわけではない。しかし今回、「TAXI」の英文字ランプを屋根に載せ、車体にチェッカーの帯をつけて流す車がやたらと目立った。フィッパラムのタクシーもある。料金は「初乗り2キロ1ドル」という説明だった。

というわけで、平壤市内の道路は混雑というほどではないが、けっこう車が行きかっている。どの車も真っ昼間というのにライトをつけている。交通事故防止のためという。ほかにも「あれっ」と思うことがあった。交差点の中央で台の上に立ち手信号で車をさばっていた女性交通指導員の姿が見えなくなっている。代わりに主な交差点では信号機が取り付けられている。「平壤名物」が一つ消えたようで、私には少しさびしかった。



■洗練された女性、洒落たレストラン

明るく洗練された感じの若い女性たちも目についた。平壤の女性といえば、これまで髪形や化粧にどこか特徴のある一つのスタイルがあった。それが今回、たとえばソウルの街で見かけるのときほど変わらない女性たちも見かけた。



案内される街のレストランも多様化し、明るくなった感じだ。大同江のほとりにイタリアン・レストランができていた。スパゲッティやピザを食べたが、日本で食べるのと味は変わらない。聞けば、ピザを焼く電気炉はイタリア製で、料理人も本場で勉強してきたのだという。

高級レストランはこれまでもなかったわけではない。しかし以前は、我々外国人など特別な人間しか出入りできないような、なにか特別な囲いの中に入り込む雰囲気があった。それがいま、一般の平壤市民らにも開放され、オープンになったという感じだった。

携帯電話も急速に普及しているようだ。平壤の街かどで中学生が携帯電話で話している姿もみかけた。前回の訪朝時は、携帯電話を見ることすら難しかった。聞けば、北朝鮮全体でいま、70万台くらいは使われているという。もちろん国内通話だけで、国外との通話はできない。

平壤郊外の万景台に故金日成主席の生家を訪ねたさい、女子大生の一行に出会った。白色のチョゴリに黒色のチマという清楚な制服だったが、手に洒落た折りたたみのパラソルを持ち、かかとの高い靴を履いている学生も少なくなかった。街中では透かし模様入りのパラソルをかざした女性たちも目立った。



■黙々と歩く人たち

スマートな着こなしの女性たちがいたとはいえ、それらはまだ、一部の光景でしかないのも事実だ。平壤市内でも多くの人たちの服装は概して地味だ。中心部を離れると、大きな袋やリュックを担ぎ、道端を黙々と歩く人たちの姿が目につく。以前と比べ減った感じもするが、相変わらずだ。自転車は、やや少なくなったようにも見えた。



板門店を訪れたさい、平壤—開城間の高速道路を走った。7年前に比べ、車は若干増えたようにも感じられたが、いぜんとして、がらんとしている。同区間168キロを通して途中で見かけた車は往復合わせてせいぜい50～60台ほどだったろうか。



高速道路沿いも、大きなリュックなどを背負った人たちが黙々と歩いている。買い出しだろうか。中年の女性たちが多い。高速道路の中央分離帯の植え込みに座り込み、ぐったりしている人も何人か見かけた。ヒッチハイクを狙い、手を挙げて車を止めようとしている人もいた。

高速道路沿いには放し飼いのヤギがやたらと目についた。前回もところどころで見られたが、このような放牧は相当に広がってきているようだ。

■動員

平壤市内では再開発の建設工事があちこちで行われていた。大がかりなのは10万戸（世帯）のマンション建設。北朝鮮が「強盛大国の大門を開く」としてきた来年、つまり故金日成主席の生誕100年にあたる2012年に向けて進められているといい、軍人を中心に国挙げての総動員態勢がとられているようだ。

平壤の大学は今年5月から全校が休校になり、学生全員が建設現場に動員されているという。これは来年4月15日の金日成主席の誕生日まで続くことになるのだそうだ。

建設工事現場はそばまで寄って見ることはできなかったが、遠目で見ると、日本で見かけるものとはかなり様相が異なる。ともかく大勢の人が群がっている。人海戦術。ヘルメット姿は見えない。



■富裕層の出現？

以上のような光景は何を物語っているのか。感じたことの一つは平壤市民の間にも格差が生まれ、一部富裕層が出現したのではないかということだ。私には7年前に訪朝した時以来ずっと頭に焼きついてきたことがあったということもある。

2004年8月、現役の新聞記者として平壤に入った時のことだった。北朝鮮が02年7月に「経済管理改善措置（7・1措置）」という名の経済改革に踏み切った時点で、主に経済問題取材したのだった。

忘れられないのは平壤の中心部、楽浪区域に設けられた「総合市場（マーケット）」のことだ。前年の03年9月に新しくオープンしていた。そこで売られている商品の豊富さ、にぎわい、そして販売員という名の売り子のおばさんたちの威勢のよさにはともかく驚かされた。この国の社会主義に抱いていた私のイメージは完全に覆させられたのである。当時の取材メモを引っ張り出して繰ってみる――。

■にぎわう市場

青いアーチ型の屋根の平屋3棟を連ねた建物。入り口の上部に「統一通り市場」と書いてある。場内は間口2メートルほどのたくさんのブースに仕切られ、各ブース1～2人の販売員がいる。衣料、かばん、飲料類、果物、菓子、家庭用品……。日常生活に必要なものは何でもそろっている。中国からの輸入品が多い。韓国や日本の産品も並んでいる。果物類など食料品は新鮮で、ソウルの下町の市場などで見るのと変わらない。販売員は全員女性で、そろいのユニホーム姿。



平壤市人民委員会の市場管理所が管轄している。市場の「会計部長」を名乗る女性の説明では、売場面積6700平方メートル、ブース1440区画。販売員は1日につき40～60ウオンの場所代を毎日支払い、午前9時から午後8時まで週6日間営業。日々7～10万人の市民がここに押し掛けるという。

販売員らに手当たりしだいに商品の値段を聞いてみた。

国産ゴム長靴1足7千ウォン、リンゴ1キロ50ウォン、中国製スポーツシューズ1足1万ウォン、日本のアサヒ・スーパードライ1本2千ウォン、パイナップル1個1万ウォン、ノート1冊150ウォン……。

商売の具合はどうなのだろうか。

醤油・砂糖売場の女性に聞くと、「60ウォンの場所代を差し引いても、日に700～1000ウォンの儲けになる。建設関係の労働者をしている夫より収入は多い」

夫が体育省に勤めるという靴売場の女性は「収入は1日500～1000ウォン。月1万5千～2万ウォンは稼げる」

バナナ、オレンジ、スイカなどを並べる女性に「バナナはどこ産？」と聞くと、「産地は知らないが、仕入れるところはちゃんとある。いまはキロ300ウォンの国産スイカが一番の人気の、日に6～8個は売れている。1日の売り上げは2千～5千ウォン」

■「限定価格」「販売禁止品」

市場の入り口付近に、「注意事項」が張り出されていた。「市場限度価格」と書かれた欄には、次のような表示があった。

トウモロコシ200ウォン、豆450ウォン、白米420ウォン、ジャガイモ60ウォン、豚肉1000ウォン、イヌ肉1300ウォン（いずれもキロ当たりの価格）……。

「売ってはいけないもの」という表示もある。

軍用品、ガソリン、生ゴム、貴金属、機械手段、各種出版物、電子媒体（周波数を固定しない半導体ラジオ）、勲章、メダル……。

市場内の写真を撮りたかったが、認めてもらえなかった。

■月給でビール1本？

私の頭は完全にこんがらかってしまった。「7・1措置」に伴う価格・生活費（給料）改定では一般の事務員の給料は月2000～3000ウォン、コメ1キロ46ウォン——などと決められていたはずだった。

それでいて市場の商品に付けられた価格、そして「これ以上の価格で売ってはならない」とする「限定価格」の高さはいったい、どういうことなのか。

これだと、一般事務員の月給では自国産の長靴一足買えない。また、その月給はアサヒ・ビール1本で吹っ飛び、パイナップル1個を買うには5カ月分の給料をはたかなければならないではないか。これはいったい何を意味するのか。

市場を見た後、インタビューに応じてくれた北朝鮮政府のシンクタンク、社会科学院経済研究所の室長、李基成先生に疑問をぶつけてみた。李先生は「7・1措置」の説明から始めた。

——「7・1措置」の狙いは実利を保障し、生産意欲を高めようというところにある。まずコメの価格について、それまでキロ82ウォン（0・82ウォン）で農民から買い上げ、8ウォンで勤労者に提供していたのを42ウォンで買い、46ウォンで売ることにした。このコメの価格を基準に、あらゆる価格・料金と生活費も引き上げた。社会保障の無償給付も一部なくした。

——食糧の配給は炭鉱労働者、技術者、科学者、教員らが優遇され、100%配給所で買うことができる。ほかの人はその時の食糧状況によって違ってくるが、1カ月に15日分とか20日分とか、ともかく全部はもらえない。（1990年代後半の）「苦難の行軍」のときは半分ももらえなかったが、いまは半分以上出ている。足りない分は市場で買うとか、その人たちが所属している工場企業所で副業地を運営するとか、農場の余った土地を耕すとかして補っている。

■農民市場から地域市場へ

李基成先生の話は要するに、配給が行き届かないことを認め、不足分は市場などで調達しているというのである。そして、その市場について次のように説明した。

——我々の社会には元もと主に農産物を扱う農民市場があった。1990年代、経済事情が悪化して食糧を国営商業網に乗せられなくなると、多くの人々がその農民市場を利用するようになった。

——そこではしだいに工業消費品や食料加工品も扱われるようになり、人びとの生活に欠かせない場となった。そんな中で金正日総書記は2003年3月、それを一般消費商品流通市場に転換する措置をとった。それによって「農民市場」という名はなくなり、「地域市場」と呼ばれるようになった。

——地域市場では輸入商品も扱える。個人だけでなく、消費品をつくる国営企業所も計画を超過達成した分についてはそこで売り買いできる。国営企業所はほかに「物資交流市場」も利用できる。地域市場で得た利益で、計画達成に必要な原料資材をその物資交流市場で買い求めることができる。

地域市場は平壤市内18の区域ごとに1～3カ所は設けられ、全国各地でも公認された。平壤・楽浪区域で私が見た「統一通り市場」はそのモデル市場だったというのである。

理屈はともかく、これは実質、市場経済でなくて何であろう。私が見た統一通り市場はまさしく「市場経済の1丁目1番地」であるように思えたのである。

それにしても、「アサヒ・スーパードライ1本2000ウォン、パイナップル1個1万ウォン」という値段は何を意味するのか。李先生は明確な答えを示してくれなかったが、要するに、それでも買うことのできる層が平壤に厳然と存在し、そのことが堂々と公認されているのだということだ。ここには表向きの経済とは別に、もう一つの経済が確実に脈打っているのである。私はそのことを実感すると同時に、やがてはこの社会においても「階層間格差」の問題が生じてくるのだらうかと予感したのだった。

■「商業は注文制で運営」

今回、平壤の街に一部富裕層の存在を感じたのにはそんな経緯もあったのである。とは言うものの、コトはどうやら、そう単純でもなさそうである。前回インタビューした李基成先生と今回再び会見できたのだが、話の内容は前回とはかなりニュアンスが違っていた。



今回、李先生は社会科学院経済研究所の「一級研究士、教授」という肩書になっており、しきりと次のような原則論を展開した。

——わが国には国営機関で生産された製品を国営商店を通して固定価格で供給するシステムがある。市場はあくまで補助的な空間で、農民が自留地で作ったものを売ったり、個々の農家で飼うニワトリや卵といった畜産物、さらには個人的な旅行者が外国で手に入れたものを売ったりする。それが商品販売の原則だ。

李先生の話を引き取って、そばに同席した同研究所の若い室長は次のように補足した。

——計画経済で運営されるわが国においては消費財の生産と供給も計画化されている。商業網は中央から農村に至るまで売店の形で国営商業網をなしており、人民生活について一番よく分っている人民委員会が管轄する。商業は注文制による管理運営方式だ。住民たちから提起される需要を商業網を通して把握し、それを集計して中央に提出する。それが軽工業に反映され、生産に結び付けられていく。

——ここ2年間、国営商品の流通量が多くなり、市場での商品流通はだいぶ減った。我々は配給制度を堅持する。

■デノミネーション

市場の役割についての説明は、7年前と比べて明らかにトーンダウンしていた。前回は確かに「社会主義の原則」を踏まえた上での話ではあったのだが、今回は力点の置きどころが違っていた。

どんな変化があったのか。思い浮かぶのは、北朝鮮が2009年11月末に突然実施した朝鮮ウォン貨のデノミネーション（朝鮮語では「貨幣交換」）のことである。これについてはいろいろと語られているが、デノミ実施直後に朝鮮総連の「朝鮮新報」（2009年11月4日付電子版、朝鮮文）が平壤発で伝えた朝鮮中央銀行の趙成鉉（音から漢字を推定）責任部員とのインタビューの内容を、ここで改めて整理しておくとなかなか次のようなものだった。

——貨幣交換は（09年11月30日から）12月6日まで7日間、全国一斉に行う。その期間に換えられなかったお金はいっさい、無効になる。

——交換比率は100対1（つまり、旧100ウォン＝新1ウォン）、但し、銀行に預金する場合は10対1で交換する。

——貨幣交換後のモノの価格は、価格調整措置をとった02年7月の水準にする。

■計画経済管理を強化

狙いなどについては次のような説明だった。

——わが国においては過去、国防力の強化などで莫大な資金を支出せざるを得なかった。結果、通貨が膨張し、人民経済の発展に不均衡が生じる非正常な現象が現れるようになった。

——こんご、経済活動の多くの部分が市場でなく、計画的な供給流通システムに従って流通するようになり、計画経済管理秩序を強化できる。

——過去、国家が企業所の生産活動に必要な物資を円満に保障できなかったため市場の利用を一部認めたが、いま、国家の能力が強化されたことで、これまで補助的な空間として機能していた市場の役割は次第に弱まっていく。

——国家と社会のために誠実に仕事をし、労働報酬を受ける勤労者が優待されることになる。

要するに「通貨膨張」、つまりはインフレの抑制を掲げて市場経済の広がりを抑え込み、計画経済を立て直そうとしたということだろう。中央銀行の責任部員はここでは触れていないが、旧貨幣と新貨幣の交換に上限額を設け、それを上回るタンス預金を無効化したといわれている。

これがどれほどの成果を収めたのかは分らないが、疑問も浮かぶ。そもそもインフレを抑制するに

は十分なモノの供給が不可欠なはずだが、それをどれほど満たせたのか。補給量が足りなければ、需給のバランスからいって再びインフレを招いていくのは必然だろう。

一方で、市場の引き締めもどこまで功を奏しているのだろうか。今回は市場を見せてもらえなかったのだが、一般論から言って、いったん放たれた市場という「じゃじゃ馬」を馴らすのはそう容易なことではないはずである。

■外貨が浸透？

朝鮮中央銀行の責任部員は朝鮮新報記者の質問に次のようにも答えてもいた。

——商店や食堂で外貨をやり取りすることは、こんご一切なくなるだろう。外国人や海外同胞が行く商店、食堂でも貨幣交換所で外貨を朝鮮のお金に換えて使うことになっている。すぐにそうなるだろう。

これは外貨の国家管理を強めようということなのだろうか。いずれにしろ、それも思い通りにはしていないようだ。現に、今回私たちは北朝鮮滞在中、すべて外貨の直接支払いだった。土産物店の買い物もすべて米ドル、中国元、日本円、ユーロで支払い、お釣りもそれらの外貨で受け取ったのである。

実際のところ、私は朝鮮ウォンを使ってみたかったのだが、ウォン札は見ることさえかなわなかった。平壤や板門店へ押し掛けた大勢の中国人観光客らの様子をうかがっても中国元をそのまま使っていた。

前日も外貨を朝鮮ウォンに換えることはなかったが、それでも街の食堂で米ドルを払うと釣銭はウォンで戻ってきたりしたのだった。

国家による外貨管理という観点から考えるとこうした外貨の直接使用はちょっと理解に苦しむ。平壤市内のタクシーの初乗り料金が1ドルであること、そして朝鮮中央銀行責任部員が商店や食堂での外貨のやりとりを周知の事実として朝鮮新報記者に語っていることが物語るように、ドル、中国元、日本円などの外貨は平壤の一般市民の日常生活の中に自国通貨に代わるものとしてすでに深く浸透してしまっているのだろうか。

■「強盛大国の大門を開く」

市場の問題はいったんさておき、李基成先生は「いま、わが国では強盛大国建設のための攻撃戦が最後の段階で集中的におこなわれている」と次のように説明してくれた。

——金日成主席の生誕100周年になる2012年までに強盛大国の大門を開くための基本課題は経済強国の土台をしっかりと築くことだ。我々はすでに世界的な政治・思想強国、軍事強国になっている。そんな状況にあって強盛大国の主攻撃戦線は経済戦線であり、経済建設が我々に与えられた課題として提起されている。

注意しておきたいのは、ここで「大門を開く」とはそこに入ることではないという点だ。実際、李先生は「はっきり申し上げたい」と断ったうえで「2012年末までに最終目標を完全に達成するというのではなく、経済強国の確固たる土台を築くことだ」と強調したのである。

北朝鮮が「強盛大国」という言葉を使い始めたのは1997年10月に金正日氏を総書記に選んだころからであった。やがてそれは、「朝鮮の未来を導く壮大な設計図」と説明され、国家建設のスローガンとなった。そして2007年11月、「金日成主席の生誕100年にあたる2012年を契機に大門を開こう」と初めてそのタイムテーブルが示されたのだった。

■1人当たり638ドル

そもそも、強盛大国とはどういうものなのか。李先生が言うように、いま、その「主攻撃戦線は経済戦線」なのだとなれば、達成目標をどう設定しているのか。李先生の話からはいま一つ具体像は描きにくかったが、この間、平壤からのメッセージがなかったわけではない。

2009年4月の最高人民会議で当時の金英逸首相（2010年6月解任）が一つの「宣誓」をおこなった。そこで金首相は「わが国はここ数年のうちに主体の社会主義強盛大国を建設する」とし、「2012年までの諸経済発展目標」に関して次のような内容を打ち出していた。

——すべての部門において最高生産年度水準を突破する。食の問題を完全に解決する。人民消費品を我々のものによって円満に生産、供給し、他人をうらやむことのないよい暮らしができる社会主義樂園に変える……

これに対して今回、李先生が私たちに明らかにしたマクロの数字は次のようなものだった。

——2007年のGDP総額は168億6千万ドル、国民1人当たりでは638ドル。

——2005年の食糧生産は545万1000トン。これにはジャガイモも穀物換算（4対1）して入れている。

——発電能力は700万キロワット。しかし設備の更新ができず、現在は能力の半分弱しか発電できていない。

ほかに、次のようにも言った。

——慈江道熙川で工事中の30万キロワットの発電所（15万キロワット2基）が2012年4月までに完成する。

——2012年末までに10万キロワット能力の軽水炉が操業を始める。

——核融合の技術にも成功した。

——合弁合作と経済貿易地帯の開発に力を入れており、今年に入り、4月に金剛山国際観光特区を設けた。6月には黄金坪・威化島経済地帯を開いた。ロシアとの協定にしたがって羅津——ハサン間の鉄道建設と羅津港の開発工事も進んでいる。

李先生の口から語られた数字は限られており、古いものも多かった。2年半前に金英逸首相が「宣誓」の中で触れた「最高年度水準」とはいつの時点の、どの程度のものなのか。「食の問題の完全解決」はどう展望されるのか。そういう点については明らかにされなかった。

いずれにせよ、現段階では金首相が「強盛大国」へ向けて描いた「社会主義樂園」とは相当な距離があるように見える。2012年に「経済強国に入る」とは、やはり李先生は言えなかったのである。

■経済計画

こんごの展望はどうか。「新しい長期経済計画はあるのか？」との私たちの問いに李先生は「いまの段階ではそういうものはない」と答える一方で、「ただし、対外的に投資を受け入れるための国家経済開発10カ年戦略計画を発表した」と述べた。

この「10カ年戦略計画」に関しては今年1月15日、朝鮮中央通信が「内閣決定」として採択したとし、次のように伝えていた。

——（この計画によって）2012年に強盛大国の大門をくぐる枠組みが築かれ、2020年には先進国の水準に堂々と達することのできる確固たる展望が開かれた。内閣はその実行を朝鮮大豊国際投資グループに委任した。

ここで大豊国際投資グループとは2010年1月に国防委員会決定として設立された投資機関で、朝鮮アジア太平洋平和委員会委員長の金養建氏が理事長となり、傘下に国家開発銀行を設立している。李先生は、10カ年戦略計画はその大豊グループが発表したものであり、計画しているプロジェクトの内容は次の4つだと説明した。

- 1 インフラ整備（鉄道、高速道路、空港、港湾建設）
- 2 エネルギー開発（炭鉱、発電所、送電網）
- 3 農業開発（種子地区建設、総合農機具工場、畜産場、肥料工場建設）
- 4 工業基地開発（平壤先端科学基地、南浦食品加工基地、羅先石油化学基地、清津重工業基地）

ここで注意しなければならないのは、李先生はこれについて「わが人民経済の発展と関係するものではない」と言い切ったことだ。

この10カ年戦略計画について日本の一部マスメディアは、第3次7カ年計画（1987～93年）の延長線上でとらえ、「約20年ぶりとなる長期経済開発計画」（2011年2月6日付朝日新聞）などと報じていたが、どうやらそのような性格のものではないようだ。「人民経済と関係ない」とは、国外からの投資でまかなう経済を国内経済とは完全に切り離してまったくの別会計として扱おうということなのだろうか。

■「人民生活向上に集中」

北朝鮮はその経済不振について長らく「帝国主義者らがわが国を孤立、圧殺しようとするなか、経済の多くの部分を国防に振り向けざるを得なかった」と弁明してきた。そして「米国が敵視政策を放棄せず核威嚇を続けるなら、我々も核抑止力を備えるしかない」「核抑止力によって通常兵器を縮小し、人的資源と資金を経済建設と人民生活に振り向ける」などとして核兵器開発を正当化し、人民に忍耐を求めてきた。

実際に核兵器をつくり、自ら「核保有国」を名乗ってからは「朝鮮半島で戦争勃発を抑止できる我々の核抑止力が強化されたことで、共和国政府は2009年から経済建設と人民生活の向上に力を集中している」（2010年3月29日、朝鮮中央通信）などとしていた。そんななかでいま、強盛大国をタイムテーブルに刻んだ金日成主席生誕100年の2012年を迎えようとしているのである。

金日成主席は生前、折に触れて「白米のご飯に肉のスープ、絹の服、瓦屋根の家」を朝鮮人民の夢として語った。「コメは社会主義だ」とも言っていた。衣食住の中では食が最も重要であるとして「食

衣住」という言い方を定着させてもきた。

国連食糧農業機関（FAO）と世界食糧計画（WFP）はこの11月、北朝鮮の食糧事情について2012年度（2011年11月～12年10月）も穀物41万余トンが不足し、300万人が深刻な食糧難に直面すると発表した。故主席があれだけ執着した食の問題が「生誕100年」を目前にいぜん、解決されていないのである。

平壤の街で垣間見た総動員態勢はそんな焦りの表れとっていいものなのだろう。

■遺訓統治

北朝鮮経済の立て直しと絡み、改革開放に進むのではないかとの観測がこの間しばしばなされてきた。昨年の2度にわたる金正日総書記の訪中にさいしても温家宝首相、胡錦濤主席が金総書記に直接、改革開放の必要性を説いたと中国側で報道された。

しかし今回、李先生はそれをきっぱりと否定した。

——計画経済は絶対に崩せない。帝国主義者が我々に求めている改革開放とは、所有制度において資本主義を導入すること、社会主義計画経済を崩すこと、そして資本主義市場経済をわが国が採り入れることだ。中国が我々に改革開放を要求することはない。我々は徹底して自主、自力更生、社会主義を堅持する。

これは中国を改革開放に導いた鄧小平の「先に豊かになれるところから豊かになろう」とした「先富論」などとは明らかに違う。北朝鮮が改革開放を警戒するのは、それに伴う市場経済化、つまりは中央ですべてをコントロールできる経済システムが崩壊することであり、それがそのまま現統治体制の揺らぎにつながりかねないということだろう。

金正日総書記を中心とする北朝鮮の現体制が金科玉条とするのは故金日成主席の「遺訓統治」である。社会科学院経済研究所の李基成先生との今回のインタビューで、同席した若い室長が最後に言った言葉が私の耳について離れない。

——商業における注文制は首領様（故金日成主席）が提示されたものだ。

日本語には通訳されなかったのだが、この国にあっては、それですべての議論は尽きるのだろう。北朝鮮は市場とうまく付き合えないのだろうか。

（了）